

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 相澤 牧人

首座主教会議（アレキサンドリア）報告

— 聖公会一致への役割を確認 —

首座主教 ナタナエル 植松 誠

世界に広がる全聖公会（アングリカン・コミュニオン）には、その一致を保つために、いわゆる「一致の機関」（Instruments of Unity）と呼ばれる四つの機構、即ち、①カンタベリー大主教、②ランベス会議、③全聖公会中央協議会（ACC）、そして④首座主教会議がある。

首座主教会議は毎年開かれることになっているが、昨年はランベス会議があったために今年の始めにずれ、2月1～5日、前後の予備的な行事も含めると、1月31日～2月6日まで、エジプトのアレキサンドリアで開催され、38管区（合同教会も含む）から35名の首座主教が出席した。アレキサンドリアは地中海に面した風光明媚な古代都市で、ローマ帝国のシーザーやアントニウスがプトレマイオス王朝最後の女王クレオパトラと浮名を流した地でもあるが、キリスト教にとっては旧約聖書の七十人訳が出された地で、福音記者聖マルコが殉教したとも伝えられている。またクレメントやアタナシオなどの教父たちが活躍したところでもある。

前回のタンザニアのダル・エス・サラームでの首座主教会議は、アングリカン・コミュニオンの分裂の危機のさなかで開かれ、しかもその当事者である米国聖公会の総裁主教が初の女性であったことなどから世界の大きな関心と注目を集めた。激しいやりとりがあり会議は紛糾したが、最後にコミュニケがまとめられた。それは米国聖公会に対するかなり厳しい忠告が盛られ、米国内の問題に関して外部から牧会・調停チームを送り込むといった提案もされた。

しかし、会議後、米国聖公会はその内容を尊重しつつも、外部からの調停チームなどの働きかけは、法規上許せないという決定を下し、また米国聖公会やカナダ聖公会の中にも、自分の教区や教会から離脱して、他の管区、例えばアルゼンチンを拠点とするサウザーン・コン聖公会やアフリカのウガンダ聖公会に所属するという人々や教会も数多く出てきた。そのような中で、米国聖公会やカナダ聖公会と関係が損なわれたとする管

□会議・プログラム等予定

（前回報告以降追加
および2月25日以降）

2月

- 3日(火) 主事会議(2月16日に変更)
- 9日(月) 渉外主査会(2月16日に変更)
- 16日(月) 主事会議(2月3日から変更)
- 16日(月) 渉外主査会(2月9日から変更)
- 18日(水) 宣教150年記念礼拝実行委員会
- 24日(火) 文書保管委員会作業会
- 24日(火) プレ宣教協議会実行委員会
- 24日(火) 祈祷書等検査委員会
- 24日(火) 正義と平和・憲法プロジェクト
- 25日(水) 青年委員会

3月

- 3日(火) 管区小審判廷(京都教区聖アグネス教会)
- 5日(木) 管区共通聖職試験委員会
- 12日(木) 聖公会・ルーテル教会協議会
- 12日(木) 聖公会・ローマカトリック教会合同委員会
- 13日(金) 主事会議
- 14日(土) 宣教150年記念プログラム実行委員会
- 17日(火) 宣教150年記念礼拝実行委員会
- 23日(月)～24日(火) 文書保管委員会
- 24日(火) 文書保管委員会作業会
- 25日(水) 礼拝委員会
- 25日(水) 広報主査会
- 26日(木) 教役者遣児教育基金・建築金融資金運営委員会
- 27日(金) 財政主査会
- 31日(火) 正義と平和委員会

4月

- 1日(水) 主事会議
- 1日(水)～3日(金) 日韓聖公会青年セミナーおよび社会宣教研修合同会議(ソウル)
- 13日(月) 会計監査
- 15日(水) 収益事業委員会
- 15日(水) 教役者給与検討デスク

(次頁へ続く)

区や教区、団体などの集まりであるグローバル・サウスは、ランベス会議に先駆けて昨年6月、エルサレムでグローバル・アングリカン・フューチャー会議(GAFCON)を開き、自分たちの立場を世界の聖公会に明確に表明した。GAFCONに参加した主教たちの中にはランベス会議に不参加の者たちもいて、ランベス会議の参加主教数は約650人とどまった。(1998年ランベス会議は約800人の参加)

今回の首座主教会議は、これらの流れの中で、今後のアングリカン・コミュニオンが進むべき方向を予測するためにも非常に重要な会議であった。今回もランベス会議のように欠席する首座主教が出るのではないかと心配されたが、ビザ取得や国内状況などの問題のために来られなかった4名を除いて全員が出席した。

昨年のランベス会議では、現在のコミュニオンの危機に対して、参加した主教の多くが、聖公会は分裂すべきでないこと、またそのための協議や方策(「聖公会契約」を含む)を実施していくためにも、①同性のパートナーと生活している司祭の主教接手、②同性同士の結婚(ユニオン)の祝福、③管区の境界を超えた他管区からの干渉、の3点についてのモラトリウム(執行猶予期間)を置くことに賛成したが、今回の首座主教会議では、管区間にモラトリウムの解釈の違いがあることは認めながらも、これを尊重することが、痛みと失意をもたらしている現在の緊張事態を和らげる上で必要であろうということにおいて一致した。

今も続いているコミュニオンの中の不調和について、それが分裂に至らないために首座主教たちの果たすべき責任についても協議され、一致への役割を担っていることを相互に確認したことは、今回の首座主教会議の大きな意義であったと思う。前回の首座主教会議の際の激しい議論の応酬に比べると、今回の落ち着いた冷静な協議は、ランベス会議のインダバ方式(誰の意見も公平に聞かれ、話し合いの中で解決への道が開かれる)の影響がここにも表れたように思えた。

最終日に出されたコミュニケでは、深い交わり(コミュニオン)のためには優しさをもった節制が必要だという今回の会議の共通の思いが語ら

(前頁より)

21日(火)～23日(木) 新任研修会(狭山)

<関係諸団体会議等>

2月25日(水) フィリピン聖公会首座主教就任式

26日(木) 日本キリスト教連合会
常任委員会・定例会(日基教団)

3月11日(水) NCC国際分かち合い委員会

23日(月)～24日(火) 第37回
NCC総会(関東学院)

れている。その中ではモラトリウムの尊重、傾聴プロセスと人間の性に関する聖書の研究の継続の必要に加えて、この首座主教会議で最も注目されていた「並行管区」の可能性の否定が明白に述べられている。これは、米国とカナダに、米・カ両聖公会から離脱した人たちの新たな聖公会管区(北アメリカ管区)を作って、米国聖公会・カナダ聖公会と両立させるという考えに、グローバル・サウスの首座主教も含む首座主教会議は反対したということである。

首座主教会議としては、そのような「分裂」に恒常的認知を与えるよりも、現在の米国・カナダ両聖公会をめぐる諸問題の解決と和解のための努力の方がもっと大事で重要であるとの判断をした。そして、両聖公会と離脱した人々や教会との調停と和解のために、カンタベリー大主教主導の調停・和解チームによる早急なアクションを勧告し、首座主教たちは、その働きを支持することを確認した。また首座主教会議では、現在作業が進められている「聖公会契約」についても、それが聖公会の一致に向けた有効な手段であるとしてその考え方と方向を支持している。

以上、今回の首座主教会議は、ランベス会議以降の聖公会の動きの中で、何とかこのコミュニオンを神から与えられた恩寵の交わりとして、一致を保っていかなくてはならないという多くの人々の祈りの中で、前途は依然険しい道が続いてはいるが、それでも神からのお導きと祝福を豊かに感じることでできるものであった。

未完了過去形

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤 牧人

「未完了過去形」これはギリシャ語の時制のひとつです。神学校の1年の後半でギリシャ語の授業を卒業(挫折)した者がこのようなことを書くのはひんしゅくを買うし、“怒るよりも笑っちゃう”と言われること間違いないでしょうが、それを凌駕するすてきなことを学ばされたので分かち合いたいと思いました。

私の神学校の頃と違って現在は、聖書の解説書や註解書などが日本語で多く出版され、誰もが“日本語で”読めるようになっていました。それらの本を様々に、たくさん読んでいきますと、ギリシャ語が分からなくてもその文章における聖書の原文のニュアンスを知ることが出来るようになりました。便利な時代になったと感謝しています。そんな中での気づきです。

大斎節が始まりました。この期節はその日々の中でことに思いをめぐらす(黙想する)ときが増えるのではないのでしょうか。そこで、思い巡らしながら聖書の中の二つの出来事に力づけられたいと思います。

それは、「種まきのたとえ」と「長血をわずらった女の物語」です。

ほかの種は良い地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった、というたとえ話(マルコ4:8)がありますが、その中の、芽生え、育って実を結び、百倍にもなったという言葉の動詞が聖書の原文ギリシャ語では未完了過去形が使われているとのことでした。

また、12年間も出血の病で苦しんでいた女性が、イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。この方の服にでも触れれば癒していただけたと思ったからである、という物語(マルコ5:28)があります。この中の思ったからであるという動詞も未完了過去形な

のだそうです。

そして、この時制が意味していることは、すでに完了した単なる過去の出来事(報告)ではなく、現在でもなお継続している出来事として描く場合の方法だということです。それはいつもいつも繰り返されていた、また繰り返されていくことを示すということでしょう。良い地に落ちた種はいつもいつも芽生え、育ち、実を結び、百倍にもなるということです。また、いつもいつも思い続けて、実践していくときに癒されるということなのでしょう。

そこで思いますことは、私たちの信仰生活は、この「未完了過去形」が表現しようとする心に似ていないだろうか、ということです。私たちは良い地であり続け、まかれた種が、いつも芽生え、育ち、実を結んでいるのでしょうか。私たちはいつもいつもイエス様を思い続け、実践しているのでしょうか。かつて信じたというような過去のことになってはいないのでしょうか。これらのことは思いを巡らす大切な材料のひとつになるのではないかと思います。

管区事務所の働きにも同じようなことがありそうです。事務所ではありますが、それは教会の事務所であり、その働きは福音の広がりのためになくはならないものであると思うのです。たくさんの会議が行われますが、一つ一つの会議が神の国の実現に向かってそれぞれの側面から為されているものであるといえます。総主事になって一つ良いと思われることは、これらの会議に出席している中でいろいろと学ばされることです。先日もある会議の中で、神の国に関して語られたのですが、神の国とは何か、それをどう説明するかということになり、それは“いのちを大切にするとところ”あるいは、“いのちを大切にされ

ている状態”のことではないかということでした。本当にそうだと思います。その神の国の実現のために、管区事務所の働きも為されていかなければならないのだと思います。そしてそれは、未完了過去形が意味する心はその根底になければならないでしょう。

そんな管区事務所の働きを、また管区の諸委員の働きを覚えていただければと願います。そし

てさらに、管区事務所は教区と、また、ひとつひとつの教会と一緒に進められていくところに日本聖公会という教会の存在意義があるのでしょ

う。主イエスの復活の喜びの備えをする期節を過ごすとき、思いを深めていきたいものです。



□常議員会

第57(定期) 総会期第4回 2月17日(火)

〔主な決議事項〕

1. 文書保管委員変更の件
(新)大江 満 (旧)名取多嘉雄
2. NCC 第37回総会期諸委員会への派遣委員人選の件
＜次号に委員名報告＞
3. 宗教法人「日本聖公会京都教区」規則一部変更の件(責任役員会決議)一承認
4. 宗教法人「日本聖公会神戸教区」規則一部変更の件(責任役員会決議)一承認
5. 管区事務所職員給与昇給承認の件(責任役員会決議)一承認
6. 真裕ビルディングからの私募債償還に関する件(責任役員会決議)

以下の報告を受けて、承認

1月28日、年金維持資金管理委員会が開催された。私募債償還について、相手方社長より元本の返済延期の申し入れと説明を受け、大筋でこれを了承した。

7. プロテスタント宣教150周年記念の件
記念晩餐会(7月7日)への出席者について決定
8. 日本聖公会宣教150周年記念プログラム実行委員会(仮称)設置の件
日本聖公会宣教150周年を迎えるにあたり、記念礼拝以外に必要なと思われるプログラムを企画し、実施する機関として、法規第105条の6に基づき、設置すること

が提案され承認

1. 目的:上記宣教150周年記念礼拝の実施に伴い、できるだけ多くの信徒、教役者の参加を促し、様々なレベルの交流を促進し、その礼拝を更に意味あるものとするため、記念礼拝以外のプログラムの計画と実施を行う。
2. 職務:委員は必要に応じて会議を行い、また各教区及び関係各方面と協力、連携しながら、表記プログラムを計画し、実行する。
3. 員数:5名程度とする。
4. 人選:首座主教と管区事務所に一任し、首座主教が任命する。尚、任期は、2009年9月23日までとする。
5. 事務局:管区事務所が担当する。
6. 予算:管区から上限350万円を補助す

■立教学院奨学金についてのお知らせ

立教学院では、1998年度から「聖公会教役者の子及び聖公会神学院校長の推薦する大学院学生に対する立教学院奨学金規程」を制定しており、聖公会教役者の子で、立教学院の各学校の児童、生徒・学生に対して奨学金を交付しております。つきましては、次年度対象となる方がいましたら、申請されますようお知らせいたします。

なお、申請の受付は小学校、池袋中高、新座中高は各校事務室、大学は財務部でおこなっており、締め切りは4月末日です。

る。

<提案理由>

1. 日本聖公会の宣教 150 周年記念礼拝を実施するにあたり、信徒・教役者の関心を深め、この記念すべき機会への信徒・教役者の参加を促す。
2. カンタベリー大主教をはじめ、各国からのゲストと日本聖公会において宣教を担っている人々との出会いと交流の場を提供する。
3. 日本聖公会における 150 年間の歩みを振り返り、歴史を検証する機会とする。
4. 日本聖公会の各教区、教会、諸団体などが、相互理解を深める機会とする。
5. 全国の教役者及び信徒の出会いと交流の場を提供する。
6. 草の根で活動する諸活動グループがアピールする機会を提供する。
7. 海外の諸教会との協働の機会を提供する。

次回からの常議員会

4月23日(木)、7月1日(水)

□主事会議

第 57 (定期) 総会期第 7 回 2月16日(月)

〔主な協議事項〕

1. 日本盲人伝道協議会での点字プリンター購入募金への応答に関して
2. 宣教 150 年記念プログラム実行委員会設置に関して
表記議案を常議員会に提案することとした。<常議員会決議事項参照>
3. NCC 諸委員会への委員派遣最終案に関し

て

候補者を選出。常議員会に承認を求めることとした。

次回以降の会議

3月13日(金)、4月1日(水)

□各教区

東京

- ・ 第 108 (定期) 教区会 3月20日(金) 9時 聖アンデレ主教座聖堂・聖アンデレホール

京都

- ・ 第 103 (臨時) 教区会 3月20日(金) 9時 京都教区主教座聖堂(聖アグネス教会)・京都教区センター 議題:基本財産変更の件

□神学校

ウイリアムス神学館

- ・ 2008 年度修業証書授与式(修業礼拝) 2009年3月10日(火) 13時半 京都教区主教座聖堂(聖アグネス教会) 説教:司祭 大町信也(北海道教区) 修業予定者:パウロ内海信武(北海道)

聖公会神学院

- ・ 2008 年度卒業礼拝 2009年3月7日(土) 14時 聖公会神学院諸聖徒礼拝堂 説教:挽地茂男師(聖公会神学院専任教員)



《人 事》

北関東

司祭 フランシス秋葉晴彦

2009年3月31日付

聖公会神学院出向および栃木聖アルバン教会管理牧師の任を解く。

2009年4月1日付

榛名聖公会教会牧師ならびに高崎聖オーガストン教会管理牧師に任命する。

司祭 ガブリエル西海雅彦	2009年3月31日付 2009年4月1日付	土浦聖バルナバ教会牧師の任を解く。 立教学院(新座中・高チャプレン) 出向を命ずる。
司祭 パウロ藤井文宏	2009年3月31日付 2009年4月1日付	熊谷聖パウロ教会牧師ならびに高崎聖オーガスチン教会管理牧師の任を解く。 土浦聖バルナバ教会牧師に任命する。
聖職候補生 ダビデ斎藤 徹	2009年3月31日付 2009年4月1日付	榛名聖公会勤務を解く。 熊谷聖パウロ教会勤務(定住)を命ずる(高崎聖オーガスチン教会・浦和諸聖徒教会協力)。
司祭 ヨハネ大橋邦一	2009年4月1日付	栃木聖アルバン教会管理牧師に任命する。
司祭 ミカエル浅見卓司	2009年4月1日付	熊谷聖パウロ教会協働司祭に任命する。
司祭 パウロ矢萩英司	2009年4月1日付	小山祈りの家協働司祭に任命する。
執事 バルナバ岸本 望	2009年4月1日付	小山祈りの家教会勤務を命ずる。
主教 ゼルバベル広田勝一	2009年3月31日付 2009年4月1日付	榛名聖公会管理牧師の任を解く。 熊谷聖パウロ教会管理牧師に任命する。

横浜

司祭 セドリック竹内 弘	2009年3月31日付 2009年4月1日付	横浜聖クリストファー教会牧師の任を解く。 定年により退職とする。 主教ローレンス三鍋裕のもとで横浜聖クリストファー教会において嘱託司祭として勤務することを委嘱する。(任期1年)
主教 ローレンス三鍋 裕	2009年4月1日付	横浜聖クリストファー教会管理牧師に任命する。
司祭 エドワード宇津山武志	2009年3月31日付 2009年4月1日付	茂原昇天教会牧師の任を解く。 藤沢聖マルコ教会牧師に任命する。
司祭 マルコ高田 眞	2009年3月31日付 2009年4月1日付	藤沢聖マルコ教会牧師の任を解く。 茂原昇天教会牧師に任命する。

中部

執事 山下 ホワード グレン ブグノセン (フィリピン聖公会)	2009年4月1日付	フィリピン聖公会北中央教区よりの出向を認める。主教座聖堂付とし、可児・美濃加茂ミッションの担当を命じる。 ただし、1月1日より同ミッション設立準備のための勤務を命じる。
---------------------------------	------------	---

京都

執事 マタイ出口 創	2009年1月17日付	西大和聖ペテロ教会および高田基督教会牧師補に任命する。
------------	-------------	-----------------------------

九州

<信徒奉事者認可> (佐世保復活教会)	2009年1月1日付 黒崎富佐子、辻裕子
------------------------	-------------------------

(直方キリスト教会)	君原實
(小倉インマヌエル教会)	東美香子、石田和史、田中徳輝、平上千鶴子、ピーター・フリーボーン
(菊池黎明教会)	蒲池近江、高橋尚子
(鹿児島復活教会)	島紀夫、坂口義孝
(福岡聖パウロ教会)	秋山献之、有村元伸、大堀満子、外池圭二、藤井東秀、園木一男
(福岡ベテル教会)	田中寛、箕田紘子

沖繩

執事 イサク岩佐直人

2009年2月21日付 三原聖ペテロ聖パウロ教会牧師補の任を解き、鳥袋諸聖徒教会において管理牧師主教ダビデ谷昌二のもとで牧師補として勤務することを命じる。

✈ 渉外主事の報告から

① モニカ久野奨学金制度の卒業生と再会

2008年9月28日、タイ北部パヤオにて、モニカ久野奨学金制度の第二期の奨学生として2008年に卒業した2名の看護師と再会した。

モニカ久野奨学金制度は、当初10名の高校生を対象に彼らが高校を卒業するまで、またその内看護学校に入学出来た学生は大学を卒業するまで、奨学金を授与するプログラムとして2001年に始まった。10名の高校生の内4名が看護学校に入学出来て、現在3名が卒業している。2004年にバンコクYMCAパヤオセンターを訪問した際に、看護学校に在学中の3名の学生と始めて会った。また今回はその内の2名と再会出来、彼らの成長を目にし、また懐かしく思った。(管区事務所だより第189号参照)

この2名は、パヤオセンター近辺の村の出身者で、ジラポーンさんとアンポーンさんである。2008年に無事看護学校を卒業しパヤオからかなり離れた街の公立病院で勤務をしているが、忙しい予定の都合をつけて各々バスで片道10時間、3時間かけて会いに来てくれたことは本当

に感謝であった。

看護師の勤務は厳しく、12時間交代勤務で完全な休みは月に三回のみである。基本的には病院の提供する宿泊施設で生活しており、病院と宿泊所を往復するだけの生活の様で、給料はタイの生活としては平均的なものらしい。二人とも生活費を切り詰めて家族に仕送りしていると話してくれた。

奨学金制度が無ければ、貧しい家庭に育った彼女たちにとっては看護師になることは全く不可能であるゆえ、この奨学金制度には大層感謝していた。希望をして看護師になることが出来たことを誇りに思い、生き生きとした生活を送っているようである。将来、出身地の近くの公立病院を希望して勤務し、自分と同じ様に恵まれていない環境にある子どもたちの医療活動に従事し、社会の役に立ちたいと、立派に語ってくれた。

もう一人の在学中の学生には、都合が付かずに会うことが出来なかったが、将来に行き会う機会を作って励ますことが出来ればと希望している。

献金をいただいたことでこの大切なプログラムを可能に出来たモニカ久野さん、および家族の方々、関係者、に感謝したい。

② ミャンマー聖公会パアン教区主教 接手・就任式と、サイクロン・ナルギス 支援

2004年から重債務国開発支援として支援してきたミャンマー聖公会・タウンゲー教区の DIFTC (ダニエル農村指導者育成センター) の責任者スタイロ司祭がパアン教区主教に選出され、2008年9月、ミャンマー聖公会から接手・就任式への招待を受けて、出席した。

ヤンゴン空港には管区総主事のケネスさんが出迎えてくださり、その夜はヤンゴン市内パンダホテルに宿泊。翌朝7時30分に車2台で管区・ヤンゴン教区の人たちと一緒に出発した。目的地パアンはヤンゴンから200km くらいの距離だが、道路事情が悪く、昼食休憩を含めて約10時間かかって到着した。米国聖公会 ERD (Episcopal Relief and Development: 災害時の救援と発展途上国の開発支援のための組織) の職員で2008年5月に発生したサイクロン・ナルギス支援のために数回ミャンマーを訪れているナグラン氏が同行した。一日遅れで西マレーシア教区の信徒代表も加わった。

翌9月19日(土)には主教接手のお祝いとしてサッカーの試合や、地元の人主催の晩餐会・祝賀会が開催された。祝賀会では子どもや成人による歌や踊りがあり、カレン族の特徴豊かなものであった。パアンはカレン族が多い所で、スタイロ司祭はもともとこの地域出身とのこと。

9月20日(日)は主教接手式が午前中、就任式が午後であり、礼拝堂には恐らく200名近くの人が集まっていただろう。午前中の接手式の間ずっと大粒の雨が激しく降っていたが、「雨降って地固まる」の諺を思い出していた。

礼拝(聖餐式)はすべてビルマ語で意味が分からなかったのが残念だが、とても印象に残ることがあった。

招待された人で、スタイロ主教が DIFTC を運営していたライコウの村の住人が祝辞を述べようとしたとき、気持ちが昂ぶって言葉にならな

い光景があった。彼女は長老派のキリスト教徒で、スタイロ主教の地元における貢献が大きかったことに感謝し、その地を離れることを残念に思うと同時に、主教の新たなチャレンジに祝福を祈る気持ち等が原因であったのだろう。とても感動的であった。

スタイロ主教は、対立している政府と少数民族の和平回復に貢献している。ライコウの村ではこの面でも多くの貢献があった。パアンでも同様の期待がされている。この対立には長い歴史があり、我々日本人には理解が難しいのだが、ミャンマーに平和が来るように祈りたい。

ヤンゴンに戻り、管区首座主教ステイーブン主教、ERD 職員ナグラン氏、西マレーシア教区信徒アンドリュー・クウー氏、管区職員、私とでサイクロン・ナルギスの支援・復興活動に関して話し合いをした。現在、ヤンゴン市南部デルタ地域の住人を対象に、将来の復興を念頭に医療・日常生活に関して管区人材を活用して緊急支援を展開している。地元の人でも未だ自由に活動することが政府に許されていない制限の中での活動である。もちろん外国人の参加は許可されていない。このような状況ではあるが支援活動は進められ、住人の復興に役立っているようである。各家庭に最小限必要な医薬品、緊急家屋修理のための建材(ビニールシート、竹・木材など)、生活必需品の一セットと継続的に米を支給している。ほとんどの農家では米作を開始することが不可能の状態。恐らく復興のために更なる支援が必要で、ナグラン氏の支援を受けてミャンマー聖公会管区事務所で作成しているところである。

管区事務所渉外主事 八幡眞也

